



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

春の風 —15歳— (後編)



### 松岡園子

「行ってきます」

この言葉を1日に2つの場所で言う。仕事へ、学校へ。仕事へ、学校へ。

中学校を卒業してすぐに就職した給食会社の仕事にも、定時制高校にも慣れてきた。

与えられている時間でいえば、昼間の高校に行っている友達と同じ1日なのに、2倍の時間を生きているような気になることがある。

同じ地域で、同じ年齢、同じ1日。でも、違う世界を生きている。ゆりは、少し開けた窓から見える六甲アイランドへ続く橋と空のコントラストを眺めた。赤とグレー。朝からずっと空は薄グレー色だ。もうすぐ梅雨入りするのかもしれない。窓から入ってくる生ぬるい風が、ゆりの熱を帯びた肩から背中をより一層じっとりとさせた。

「さあ、ひと段落したな。あとは後片付けだけや。今日は金曜日やさかい、湯飲みを消毒しよか。やったことないやろ？」

職場で配置換えがあり、一人で製菓工場の食堂でのまかないを担当するようになって2週間ほどになる。1時を過ぎて急にがらんとした食堂に、影山さんの声がエコーのように響く。

「影山さんの仕事の方はいいんですか？」

「あと階段掃除するだけやから、これ浸けてから行くわ」

ゆりと影山さんの共通点は、同じ製菓工場と同じ時間に委託業者として働いているということだけだ。所属会社も違うし、仕事の内容も違う。自分の仕事とは関係のない湯飲みの消毒をするなんて、余分な仕事のはずなのに。

影山さんは、四角いバケツのようなブルーの桶にお湯を張り始めた。足元には、キッチンハイターの大きなボトルが置いてある。

「ここの茶色うなっとなが、ハイターしたらきれいになるならなあ」

影山さんのごつごつとした手に握られたハイターのボトルから、ちょろちょろと液体が桶に落ちていく。

「プラスチックは割れへんけど、これがあるからな」

白い湯飲みの内側が茶色く変色してきているのは、ゆりも気づいていた。いつも洗う時に強くこすってみるが、茶色いままだった。でも、それがハイターできれいになるなんて、知らなかった。仕事をしながら1つひとつ新しいことを知っていく。仕事をしていると、お客さんや一緒に働いている人のために動き、考えることが多い。もちろん、お給料をもらっているのだから当たり前なのかもしれないけれど、影山さんがしてくれていることは、それ以上のものがある気がする。

「お母ちゃんはどうや？」

影山さんは、桶の中で湯飲みが重ならないようにずらしながら沈めていく。

「……しんどいって言って落ち込んでる時もありますけど、作業所にも行ってて楽しそうな時もあります」

「お姉ちゃんが仕事を楽しそうにしてたら、お母ちゃんを安心させてあげれるんと違うか」

ゆりはそれを聞いて、朝、仕事に出てくる前の夏子の目を思い出した。ゆりだって最近、家で「しんどい」と口にすることが増えている。毎日毎日、仕事と学校で求められることの繰り返しで、家にいる時に気が抜けて思わず口にしてしまう言葉だ。それを聞いた時の夏子の目は、ゆりの方を真っ直ぐに見ない。いや、見ることができないのかもしれない。泣き出しそうな、何か強いものに怯えているような目だ。

「お姉ちゃんの仕事は、ほんまに重労働や。でもお母ちゃんにしたら、自分のために重労働させてると思うのは、つらいで」

確かにそうかもしれない。

窓から吹き込んだ風が、ゆりの顔に勢いよく当たってくる。

「さ、全部浸かったな。風が強くなってきたし雨が降り出すかもしれへんから、掃除の続きをしてこよか。あと30分は浸けとくさかいな。お姉ちゃんが帰る前に取り出したら、ちょうどええわ。後でな」

そう言って影山さんは食堂の勝手口に立てかけてある、ほうきとちり取りを片手で掴んだ。影山さんの体の横にあると、ほうきとちり取りは小さく見える。

小さい頃から夏子には何でも言って甘えてきた。でも今も、しんどいと口にするだけで何かが変わるのだろうか？ それを聞いたからといって、夏子の調子が良くなるわけではない。むしろ、自分のせいで子どもがしんどい思いをしていると、気分を沈ませてしまう。それなのになぜ、自分は思ったことをそのまま言うのだろうか。お母さん……だからだろうか。でも、お母さんだからこそ言わない方が良くもある。今は特に、そう感じる。

窓の隙間から、湿った草の匂いが入ってきた。ゆりは給食鍋を洗う手を止めて、外を見た。六甲アイランドへ続く橋を通る車が、路上の水を弾いて走る音が聞こえてくる。時計を見ると、もうすぐ3時になるところだ。

「早くしないと」

独り言のようにつぶやく。今日の1時間目は簿記の授業だから、遅れずに行きたい。ゆり

はこの間、教室の前を通りかかった時に見た、大人クラスの人達の授業への真剣な眼差しが忘れられなかった。大人になったら、勉強なんてしなくなるものだと思っていたのに。

高校の授業を終えて最寄の駅に帰り着くと、ホームの時刻表に挟まれた時計の針は10時前を指していた。改札まで小走りで駆ける。少し慌てた様子で、小さく畳んでいた折り畳み傘のスナップを外す。お母ちゃんは起きているだろうか？

家までの上り坂を早歩きしてきたゆりが玄関の門に手をかけると同時に、ドア横の窓からぼんやりと明かりが見えた。まだ起きているようだ。傘を畳んで4、5回振ると、そのまま外の壁に立てかけた。

「ただいまぁ」

自分の声がいつもと違う。

家でこんなに弾んだ声を出したのは、いつ以来だろうか。

靴を脱いで、荷物を持ったまま夏子の部屋へ向かう。引き戸を開けると、布団に入ろうとしていた夏子と目が合った。

「寝るところ？ はい、おみやげ」

駅前のコンビニで買ってきた四角いチーズケーキだ。

「明日にする？」

「ん、今食べる」

夏子の目が幼い少女のように光った。

ゆりは夏子の分をテーブルに置き、自分の分も袋から出した。昨日、やっとこたつ布団を片付けた。それまで覆われていたテーブルの足の部分が見えるようになると、何だか違う部屋のように見える。

「すっきりしたね」

少しだけ開けた窓の隙間からは、湿った風が糸のように入ってくる。体にまとわりつくような湿気を帯びた風は好きではないはずなのに、今日は気にならない。

「こたつ布団がなかったら、この部屋も結構広いんや。寒くない？」

毎年こたつ布団を出し入れしているのに、片付ける度にそう思う。

「寒くはないよ。もうすぐ6月やし。ごちそうさま。さっき、寝る前の薬飲んだから、もう寝るわね」

チーズケーキのパッケージを手のひらで真っ直ぐにならし、台所のごみ箱に運びながら夏子が言う。その後ろ姿も少女のように見えた。

ケーキの甘さが口の中で溶けていく。仕事をしていたのも、学校で授業を受けていたのも、もうずっと前の自分のように思えてくる。

明け方、目を覚ましたゆりが型板ガラス製の窓に目をやると、ブルーの空と光が広がっているように見えた。窓を開けると、思った通りの天気だった。吹き込んでくる空気を、鼻か

ら思いきり吸い込む。少し湿り気を帯びているが、力強い匂い。朝日に照らされた家や木々は、汚れを落とした洗濯物のように自信に溢れ、胸を張っているように見える。

日光と共に入ってくる風が、部屋の中の空気を躍動させる。「一緒に踊ろう」と誘い合っているんじゃないかと思うほど、床や天井を跳ね回る。

乾いた風、湿った風、強い風、優しい風、温かい風、冷たい風——。春には色々な風が吹く。受ける風が、気分まで変えていく。私はお母ちゃんにとって、風なんだろう。お母ちゃんも自分にとって、また風だ。風と風が影響し合って、つむじ風が起きたり、台風になったり、そよ風になったりする。

これからどんな風を創り出していくんだろう。

ゆりはもう一度、鼻の奥まで空気を吸い込んだ。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。